

第12回「日本語大賞」

テーマ「心にひびいた言葉」

小学生の部 優秀賞 受賞作品

「言霊」

カナダ

バンクーバー補習授業校

小学五年 漆谷 修真

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

ぼくには、一つ年上の姉がいる。一つしか年が変わらないので、仲が良い分、けんかもよくする。けんかすると、お互いにひどい言葉を投げつけたり、ひどい時にはたたいたりけつたりしてしまう時もある。それが日常茶飯事だ。

ある日、いつものように姉とけんかをして、カツと頭に來たぼくは、

「おまえなんて、死んでしまえ。」

と姉に向かって大声でさげんだ。

それに対抗して姉も、

「あんたこそ、死んじやえばいいんだ。」

と言いつ返してきた。

毎回、どちらかがなくまでけんかは終わらない。だけど、その日はいつもと違った。いつもはだまつて見ている母が、

「そんなひどい言葉を使わないで。言霊が宿るよ。」

と悲しい顔でぼくたちに言った。母の悲しい顔とそのなぜか重みのある言葉のせいか、ぼくたちはそれ以上のしり合うことなく、けんかはそれで終わった。そして、初めて耳にするその「言霊」という言葉にぼくは興味をもった。その後、母は言葉には魂が宿って現実になることがあるという話をしてくれた。ぼくは、何となく不安な気持ちになって、家にある国語辞典で調べてみた。ところが、今まで分からない言葉がのつていなかった事なんてなかったのに、「言霊」はのつていない。それでも好奇心の方が勝って、インターネットを使って調べてみた。最初にびっくりしたのは、「ことだま」と入力すると「言葉と霊」で「言霊」と変かんされた。「言葉の霊」と考えると、ますます怖くなってくる。「言霊」とは、言葉に「もつている」とされる不思議な力で、良い言葉を発すると良いことが起こり、不吉な言葉を発すると思いが起こると日本では昔から信じられてきたそうだ。ぼくは心臓の奥深くがとても痛くなった。ぼくの大切な姉に何かあったらどうしよう不安な気持ちでいっぱいになったのだ。けんかをして一時的な感情で使ってしまった言葉にとっても後悔した。

ぼくは小さい頃から、親に「物には神様がいるから、最後まで大切に使う。」と言われてきた。だから、今は「言霊」も、言葉にきつと神様のような何か重厚なものが存在するから、それを大切に使うていくことで、ぼくの周りでは良いことが起きてみんなが幸せになるんじゃないかなと思った。そして、それはぼくの周りだけでなく、テレビや雑誌、SNSの中にあふれている無責任なひどい言葉に対しても言えることで、みんなが美しい言葉を使うようになれば、もつと世の中がより良い方向に向かつていくのではないかと思った。そう、言葉には魂があるのだ。